

## はじめに

不安と恐怖は人間の生存本能に基づく情動反応である。乳児が見知らぬ人に対して示す不安や恐怖はその原初段階のもので、その際乳児は母親に救いや安心を求めて愛着行動を取る。「甘え」の現象である。ここで重要なことは、不安や恐怖を行動で示し、母親に安心を求めていることができるためには、愛着によって得られる安心とその心地よさを体験的に知っていなければならないことである。もしもなんらかの理由によって、好ましい愛着形成が損なわれた場合、子どもは愛着を求めて母親に接近することを逡巡し、あからさまな不安や恐怖を示すことが困難になる。そのような状態が持続し増強していくと、さまざまな病理的行動でもって反応するようになる。しかし、母親との間で愛着が形成されると恐怖を示すことができるようになる。例えば、それまで高いところに平気で登っていたのに、急に怖がるようになるといった具合である。そのような変化をみると、恐怖反応は「甘え」と表裏一体の現象であることがわかる。幼少期になんらかの事情により、母親に甘えたくても甘えられない経験をしたならば、おどおどして自己主張できない子どもになりやすい。しかし、「甘え」を断念することはできず、いつも親の顔をうかがう行動を取るようになる。土居<sup>1)</sup>のいう「変態的な依頼関係」である。このような母子関係においては、母親は子どもの意思や意図が掴みづらいために、つい過剰な指示的関与を取りやすくなる。その結果、子どもは自発的な行動を取ることがますます困難となり、母親の焦燥感と苛立ちは強まっていく。このようにして母子間に負の循環が生まれ、後々子どもに多様な病態が生じやすい基盤となる。もしも不安や恐怖を生むような状況に置かれていても、甘える対象を見い出せないとき、子どもはどのような行動を取るのでしょうか。恐怖症の病態は、そのような反応の一種として理解することができる。

## 1 恐怖症の成り立ち

人間にとって不安や恐怖をもたらす体験は数限りないが、ある意味、乳児においては常にそのような体験の連続だといってもよい。新奇な状況ばかりに身を置くことになるからである。そのような状況の中でどうにか生きていけるのも、愛着を通した母親をはじめとする家族の保護があるからである。人見知りするようになると、乳児は新奇な場面に置かれた際に、自分がどのように行動したらよいか、その拠りどころを母親に求める。母親参照である。それによって自分の置かれた状況の意味を理解するようになる。その結果、強い不安をもたらしていた把握し難い漠とした状況が次第に輪郭をもったものとして浮かび上がってくる。名状し難い不安が輪郭をもった対象へと変容し、それが恐怖の対象へと変わる。精神病的不安と神経症的不安の1つの分岐点である。したがって、自らの不安が何に由来するものなのか、母親を通して理解することが困難な状況に置かれたならば、

そのような名状し難い不安を軽減するために、なんらかの恐怖の対象を見出すことになる。置き換えといわれる心の働き(防衛機制)である。恐怖症の成り立ちをこのように考えていくと、恐怖症の治療は、恐怖の対象に対する認知の修正や、恐怖の度合いを軽減するための方策(薬物療法など)のみでは根本的な治療にはならないことがわかる。子どもが甘えたくても甘えられなかったのはなぜか、幼少期の複雑な親子関係の事情を理解するとともに、それが現在の親子関係にどのように反映しているかを考えていくことが求められる。

## 2 Freud S の理解

恐怖症の精神力動的理解を考えるうえで必ず引用されるのが Freud S<sup>2)</sup>の報告した「ある5歳男児の恐怖症分析」で、俗に「ハンス症例」と呼ばれている。ここで述べられている恐怖症理解は、その後精神分析の立場如何にかかわらず、精神療法に少なからず影響を与えてきた。

### 1 ハンス症例の概略

4歳9ヵ月のハンス少年が馬に咬まれるのではないかと恐怖を示したために、その父親が Freud の治療を受けたことに始まる症例報告である。この父親は Freud の忠実な弟子で、以前から Freud の精神分析に傾倒していたことから、父親は Freud にハンスの詳細な経過を報告し、その都度 Freud から助言や指導を受けるという形で治療が行われている。

発症以前からの詳細な経過報告によれば、3歳過ぎた頃より、ハンスは性に関する好奇心が高まり、中でもとりわけおちんちん(ペニス)への興味が高じて両親に次々に質問したり、身近な子どもたちのおちんちんを見たり、尋ねたりするようになった。このような性的関心の高まりとともに、本症の発症に関連した要因として父親の言によると「母親があまりにもかわいがり過ぎたことにより、ハンスの性的衝動が興奮した」という。Freud の助言を忠実に実行した父親の報告を通して、ハンスが最も恐れたのは、妹の出生によって母親の愛が受けられなくなるという不安と、父母の間で生じた去勢(エディプス)不安によることが明らかになった。父親はハンスの性に関する話を丁寧に聞いてやった。それは時に尋問調になるほどまでの熱心さを示すこともあったが、Freud の助言と父親による根気強い話相手によって、この時期抱いていたハンスの不安は和らぎ、5ヵ月の短時間で馬恐怖は治癒したという。この治療を通して、Freud はこの恐怖症を、父親に対する嫉妬と敵意を含んだエディプス状況に対する葛藤対象が父親から馬に置き換えられたものであると理解した。

### 2 Freud の理解に対する疑問

この報告は父親による詳細な記述が素材の中心で、Freud はその助言と解説を述べている形を取っているが、奇妙なことにハンスの母親がどのような人であったか、具体的な描写がまったくなされていない。Freud もそれに対して「母親はある運命的役割を演じており、その立場は複雑困難なのである」と含みのある表現をしているのみである。実は母親は Freud の患者でもあったことか

ら、当然家族背景に複雑な事情があることが推測されるが、この点について Freud は敢えて触れていないのである。

しかし、報告の中でハンスがいかに母親を求めていたかを推測させる記述は少なくない。例えば、発症前の朝、泣きながら上がってきて、なぜ泣いているのという問に対してハンスは母親に「寝ているとママがいなくなって、それでぼくは甘えるママがないと思ったの」と答えている。夢の中でママがいなくなったので、不安が起こり、幾度となく母親から離れようとせず甘えようとしていたというのである。ハンスの不安の内容は、「母親を失うこと、その結果母親に甘えることができなくなるというものであり、したがって、母親への愛着が非常に高じていたに違いない。これが症例の基本現象である」と Freud 自身明記しているにもかかわらず、この母子関係について以後なんら治療的に扱われないままに終わっている。ハンスにはごく早期における母親との愛着体験、甘えがうまくいっていなかった結果として、既に3歳までにいろいろな事柄が起こっていたのではないかとの思いがどうしても浮かび上がる<sup>3)</sup>。

次いで検討しなければならないのは、なぜこれほどまでにハンスの知的好奇心が高まったのかという問題である。愛着関係、つまりは「甘え」という情動的なつながりにおいては、情動の世界に身を委ねることの心地良さが体験されるが、もしも「甘え」が享受できない場合、逆にこのことが不快なものとして回避され、そのような漠とした不安から逃れるためにはよりはつきりとした形になるものにすがりたくなり、それが時に「とらわれ」となる。ハンスのペニスへの好奇心にはそのような一面もあるのではないか。それこそ屈折した「甘え」体験によってもたらされたものなのではないかとも思われるのである。

### 3 森田理論による恐怖症理解

Freud とは大きく異なるのが、わが国独自の治療論を展開してきた森田理論による恐怖症理解である。森田<sup>4)</sup>はその鍵概念であるヒポコンドリー性基調、森田神経質、精神交互作用をもとに、恐怖症の成り立ちを以下のように説明している。

「ヒポコンドリー性基調の強い神経質者においては、常に刺激性過敏であれば、種々の外的刺激によって驚愕や恐怖などの身体的変化に類似したものが意識下に起こり、それに続いて不安恐怖が起こる。それはまるで心悸亢進が起こった時に不安恐怖を伴うようなものである。したがって、神経質者は不定の恐怖、すなわちある一定の対象なくして唯なんとなき自己の生存を脅かすものがあるが如く不安を感じ、その後次第にこれを外界の認識と統合し、全く常人の恐怖に値せざるものまでもこれに恐怖的色彩を付して知覚判断し、もって初めて具体的恐怖を構成し、一定の恐怖症を呈するに至る」という。

### 4 森田神経質に対する土居の批判

この森田の考え方に対して、「甘え」理論の提唱者である土居<sup>5)</sup>の批判がある。

森田は恐怖症を発症する患者に素質としてのヒポコンドリー性基調を想定しているが、ヒポコンドリー性基調の特徴である身体へのとらわれを、森田は人間の本性である生存欲の現れだとしてのみ説明しているのに対して、土居はヒポコンドリー性基調にみられる疾病恐怖自体を症状として捉えなければならないとし、大切なことはこのような疾病恐怖がどのような不安によって引き起こされているのかを理解する必要があるという。このような神経質者の疾病への「とらわれ」そのものの成り立ちを考えようというわけである。土居は自験例である神経質者の精神療法を通して彼らの心理的背景として「甘えたくても甘えられない」という言葉で表現しうのような精神状態の1つのゲシュタルトは神経質患者特有なものであるとみなし、疾病恐怖、あるいは他の一定の恐怖症を生む患者の心理的背景、つまりは神経質患者に「甘え」の病理としてのアンビヴァレンスを見て取ったのである。

## 5 「甘え」のアンビヴァレンスと恐怖症

森田は神経質者に一般的にみられる刺激性過敏(知覚過敏)が精神交互作用(負の循環)により恐怖症をもたらすと述べるにとどまっているが、それは「甘え」の病理との関係で以下のように考えることができる。

神経質者は「甘え」のアンビヴァレンスが強い「甘え」の体験を享受していない。その結果、養育者との間で信頼感や安心感が十分に育まれない。すると、程度の差こそあれ、周囲他者(主に養育者をはじめとした大切な人)に対していつも自分が受け入れてもらえるか、つまりは甘えられるか否かに気を遣い、相手の顔色をうかがう心的状態になる。土居<sup>1)</sup>のいう「変態的な依頼関係」である。そして安心感のない状態にあつては、常に周囲他者の動向に神経を研ぎ澄ましているため、周囲の刺激に対して過敏に反応する。その結果、刺激過敏性がさらなる不安感を助長するため、刺激過敏はより一層高じていくという負の循環が生まれる。このことを森田は精神交互作用として取りあげているが、これは「甘え」のアンビヴァレンスとそれに基づく安心感のなさを基本に考えていくことによって、より一元的に理解できる。

## 6 母子面接による精神療法の実際

### 1 自験例：A男、13歳11ヵ月、中学2年

主訴：外泊するのが怖い(外泊恐怖)。

家族背景：会社員の父親と専業主婦の母親と一人っ子のA男、そして父方祖父母の5人家族。今時珍しい家父長制が色濃く残存している代々続いている商家である。祖父は細かなことにも口うるさいが、祖母は何も言わず大人しい。そんな祖父に対して父親はいつも距離をとって接している。

生育歴および現病歴：乳児期からいつもおっぱいを求め泣くことが多かったため、泣くとすぐに祖父が「どうしたんだ」とうるさく言うため、母親はA男を泣き止ませようと、すぐにおっぱいを吸

わせていた。いつまでたっても乳離れが難しかった。3歳、虫歯のために受診した歯科医から、おっぱいのせいだと言われたために母親はひどく動揺し、むずかるA男に断乳を行った。さらに集団に早く慣らせようと体操教室にも通わせることにした。そこでは少し集団の中に入れると、すぐに母親のところに戻ってくるなど、なかなか馴染めなかった。幼稚園や小学校に通うようになって、開始当初はその場に馴染めず、時折休むこともあった。

今回の発症の直接的な契機となったのは、小学3年の夏行われた体操教室の合宿での出来事だった。合宿の開始前から少し熱があったらしいが、A男は何も言わず参加した。しかし、最初の夜、具合が悪くなって、夜中に両親の迎えて帰宅を余儀なくされるということがあった。また同年夏、母親はいつものように実家に帰るつもりで、A男を誘うとなぜか「いやだ」と言って断った。祖父母と父親と一緒に留守番をすることになったが、母親が実家に着くなり、A男は母親を求めて泣き出した。祖父と父親はA男の対応をめぐって口論となった。知らせを受けて母親は翌日すぐに帰ったが、そのとき、A男は食事も摂らず、憔悴していたという。夏休み明け、短期間不登校気味であったが、その後は休むことなく学校には通っていた。しかし、学校での行事で宿泊しなければならないときには激しく抵抗して拒否した。家族旅行でも宿泊は困難であった。

A男は目立った反抗も見せず、自己主張も少なく、いつまでも母親にべたべたくっついてることが多い状態が続いていた。中学に入っても外泊のできない状態が続き、修学旅行も近づき、どうしたらよいかとの相談での今回の受診であった。

初診時、A男は口数が少なく幼な顔で、母親への依存が目についた。しかし、筆者が最も気になったのは、乳児期に乳離れが困難であったのはなぜか、明らかに母親から離れることに強い不安を示していたA男に、強引と思われるような分離を行おうとしたのはなぜか、ということであった。母子同席での面接を開始した。面接の頻度は家庭の事情で、不定期であった。毎週、時には数週間に1回であった。

最初の数回で浮き彫りになったのは、母親のA男に対する理解にA男自身の気持ちと大きなずれがあることであった。例えば、発症の直接的な契機となった合宿で、迎えに来た母親はA男に向かって「よく頑張ったね」と褒めたという。合宿の少し前から体調が悪かったにもかかわらず、無理して出かけたA男は非常に心細かったに違いないが、それが母親には理解できていないようであった。その他、母親にA男のことについて尋ねても、わかりづらいと首を捻るのだった。その際、筆者がとても気になったのは、A男自身に直接尋ねると何も言えないが、母親に尋ねると、事あるごとに2人の間に割って入り話したがることであった。こうしたA男の行動に、筆者は「天の邪鬼」ともいえる屈折した「甘え」を見て取った<sup>5)</sup>。筆者はそこに見え隠れするA男の「甘え」を感じ取っていたのである。7ヵ月経過した頃、筆者はA男がいつも面接で一步引いた態度を取っていることを取りあげ、「あなたはいつもどこか一步自分を引いているように感じるね」と指摘した。するとA男は「そうだと思う」と素直に反応した。この面接が契機となって、A男は自分の気持ち、意見を言うようになった。こうしてA男は次第に自己主張をはっきりとするようになり、それまでの幼い印象から脱皮していった。その一方で母親は、子どもをこのようにしてしまったことに対する自責感、罪悪感が強まっていった。ただ、そこには子どもが自分から少しずつ離れるようになったことによつ

て誘発された見捨てられ不安が感じ取られた。10ヵ月後、修学旅行が近づいたためにA男の不安が強まった。その前日、A男は「とにかくいやだ!」という感情が沸き起こったという。彼の中に沸き起こった思いが「こわい!」ではなく「いやだ!」であったところに、筆者は幼児が母親の前で駄々をこねている姿を想像しながら肯定的に受け止めた。母親に対する反抗が歪んだ形で表現されたものではないかと思われたからである。結局、当日集合場所まで行くことはできたが、旅行には行けなかった。その後、A男は面接で母親への批判を口にするようになった。母親の不安は強まり、ついに母親は不安発作に襲われ、治療を自ら求めるまでになった。これが契機となって、その後の治療は母親面接を中心に展開した。その過程で明らかになってきたのは、A男の乳幼児期の子育て期間、母親は実母に「跡取り息子で一人っ子だから甘やかしたらいかん」と口うるさく言われ、相談しても「あんたがしっかりせんからだ」と叱咤されるだけで、誰にも本音を打ち明けられず、ただ周囲の期待に応えようと懸命に頑張ってきたという孤立した母親の姿であった。母親自身、実母との間で強い葛藤を抱き、本来の「甘え」を享受できていなかったことがうかがわれた。その後、A男は高校に入学し、間もなく学校行事に参加して外泊することもできるようになった。

なお、事例の匿名性を考慮して細部は改変した。

## 2 自験例からみた恐怖症の成り立ち

本来ならば、恐怖心は愛着行動によって緩和するが、愛着関係成立になんらかの問題を抱えている場合、つまりは「甘え」が十分に享受されなかった場合、恐怖心が生じるような状況にあってもそれは抑え込まれてしまう。したがって「甘え」の問題の所在を解明することが治療の要として重要になる。

自験例に即して解説するならば、「甘え」の問題は<母-子>関係および<子-治療者>関係の中に屈折した形で表に現れている。子どもは治療者と向き合って自分を語ることはできないが、母親が治療者と話している中に割って入るといって自分で出す。それは「天の邪鬼」といってもよいような関係の病理である。そのことを認識したうえで、治療者は子どもの内面を丁寧に探っていく必要があるが、そこでとりわけ重要なことは、子どもが治療者に示す対人的態度の特徴を、さり気なく子どもに取りあげて一緒に考えていくことである。この事例において治療者は「あなたはいつもどこか一步引いているようだね」と指摘したことがそれに当たるが、このことが契機となって以後子どもは「これまであまり自分に向き合ったことがなかった」と振り返るほどまでになり、次第に「つかえていたものが取れた感じ」になったのである。こうして子どもは母親との間で心理的距離を取ることができるようになったが、するとそれに代わって母親が強い不安発作に襲われるようになっている。以後の母親面接を通して、子どもが母親に「甘えたくても甘えられなかった」背景には、母親自身が実母との間で「甘え」の葛藤をもち、育児に没頭することが困難であったこと、そのため子どもはおっぱいを求めるもののいつまでも満足感を得られず、執拗におっぱいにしがみついていたこと、そのことが母親の焦燥感を刺激し、強引な断乳に至ったことなどが明らかになったのである。「甘え」の病理は世代を超えた関係の病理として認識することの重要性が示唆される事例である。

**おわりに** 以上、恐怖症に関する精神力動的理解を、Freud、森田、土居らの見解をもとに解説するとともに、自験例を通して恐怖症の成り立ちについて筆者の考えを述べた。

今日、子どもに典型的な恐怖症を診ることは減ってきたように思う。それに比して、成人での多様な恐怖症は増加の一途を辿っている。パニック障害、社会恐怖、対人恐怖などである。このような変化は、明確な輪郭をもった特定の対象というよりは、不特定多数の対人場面が恐怖の対象となっていることを示している。病態水準はより深刻さを増しているのではないか。明確な輪郭をもつ対象や事象に恐怖を抱くような置き換えという防衛機制が働くためには、愛着対象の存在がある程度明確に存在していることが必要である。今や身近な家族との間でさえ人間関係の希薄化が進行しているのかも知れない。

(小林隆児)

#### ●文 献

- 1) 土居健郎：神経質の精神病理：特に「とらわれ」の精神力学について。精神神経学雑誌 60：733-744, 1958(土居健郎：日常語の精神医学。pp9-39, 医学書院, 東京, 1994 所収)。
- 2) Freud S：ある五歳男児の恐怖症分析。フロイト著作集 5, pp173-275, 人文書院, 東京, 1969。
- 3) 小倉 清：「ある五歳男児の恐怖症分析」；「ハンス症例」。現代フロイト読本 1, 西園昌久(監), 北山 修(編集代表), pp176-189, みすず書房, 東京, 2008。
- 4) 森田正馬：新版 神経質の本態と療法。白揚社, 東京, 2004。
- 5) 小林隆児：「甘え」(土居)と“vitality affects”(Stern)；「甘え」理論はなぜ批判や誤解を生みやすいか。精神分析研究 56(2)：134-144, 2012。